

萩原朔太郎
生誕140周年
140th Anniversary
世田谷文学館
×
下馬図書館

世田谷と

詩人 萩原朔太郎

「詩は、言葉以上の言葉である」

萩原朔太郎

詩、デザイン、音楽―萩原朔太郎の多彩な魅力。

2026

10/31<土>
14:00-15:00

会 三茶しゃれなあどホール(世田谷区三軒茶屋1-41-10)
田園都市線 三軒茶屋駅(南口A) 徒歩3分 ※詳細はチラシ裏面参照

申問 先着50名 下馬図書館(03-3418-6531)



講師 原辰吉

世田谷文学館学芸員。近代作家の資料調査・企画展示を担当。文学資料の魅力を掘り起こし、展示や解説を通して文学の楽しさや奥深さを伝えている。コレクション展「没後50年・椎名麟三と『あざって会』」(2023)、企画展「ドナルド・キーン展 Seeds in the Heart」(2025)などを担当。

萩原朔太郎 詩人。1913(大正2)年に北原白秋主催の『朱楽(ザムボア)』に5編の詩を発表して詩壇にデビュー、同誌上に室生犀星を見だし生涯にわたる親交を結ぶ。1917(大正6)年には詩集『月に吠える』で独自の詩風を確立し、一躍詩壇の寵児となる。1923(大正12)年『青猫』を刊行して以降、妻との離婚や父の死を経験し、1934(昭和9)年に出した『氷島』では詩風を一転させた。以後ほとんど詩作をせず、『日本への回帰』(1938)等、主にアフォリズムや文化評論を書いた。世田谷区在住期間は、1931(昭和6)年から1942(昭和17)年の11年間。

日本の近代詩を切り拓いた詩人・萩原朔太郎は晩年を世田谷区で過ごしました。

多彩な創作活動や作品にまつわるエピソードとともに、世田谷ゆかりの作家との交流の様子をご紹介します。

主催 世田谷区立下馬図書館 協力 世田谷文学館

写真 代田の家の庭で1935(昭和10)年ごろ 出典 国立国会図書館「近代日本人の肖像」(部分)
背景画 萩原朔太郎『月に吠える』挿画 恩地孝四郎《抒情 (よろこびあふれ)》